The Japan Society of Educational Sociology

高校教育の構造変容 (1)
―教育活動の組織と教師のパースペクティブ

○樋田　大二郎(聖心女子大学)
○荒川　葉(お茶の水女子大学大学院)
○金子　真理子(東京大学大学院)
耳塚　寛明(お茶の水女子大学)
堀　健志(日本学術振興会特別研究員)
苅谷　剛彦(東京大学)
大多和直樹(東京大学)
岩木　秀夫(日本女子大学)

1．はじめに

A．本研究の出発点＝1979年調査

我々は、1979年度に第１次調査として大都市および地方の公立高校を対象に『トラッキング』の観点から「高校生の生徒文化と学校経営」調査（以下「79年調査」）を実施した。次いで第２次調査として1997年度に地方の高校を対象に高校教育変動の探求を目的に「高校生文化と進路形成の変容―1979年調査との比較によるトラッキングの弛緩を中心に」調査（以下「97年経年調査」）を実施した。さらに、これら２つの調査で浮かび上がった課題を検討するために、第３次調査として1999年度に調査方法は同じで対象校を拡大した補充調査を実施した（以下「99年拡大調査」）。本報告の課題は、主として99年拡大調査の結果をもとに、79年調査から２０年を経た今日の高校生文化と進路形成の変動の状況を明らかにし、加えて変動のメカニズムがどのような枠組みのもとで把握可能であるのか検討することにある。

79年調査は、①文書蒐集と聞き取りによる学校経営・組織調査、②教員集団の対生徒パースペクティブを扱った教員対象の質問紙調査、③高校生文化（価値観と行動様式）、進路意識を中心とする生徒対象の質問紙調査から構成され、結果は東京大学教育学部紀要第20, 21巻等に報告されている。79年調査当時は、その後の高校を取り巻く環境の急激で大規模な変化を迎える前の時代であった。当時の問題関心は、1)いわゆる高等学校の学校格差（高校のランク・タイプ）に応じて形成される高校生文化の生態、2)そこでの生徒の進路形成のメカニズム、3)それらを生み出す学校組織・指導体制など多岐にわたっている。これらを通して私たちが明らかにしたのは、トラッキング的な高校生文化と進路形成のメカニズム、すなわち中学時代の成績に応じたランクの高校に進学し、ランクに応じた高校生活を送り、そしてランクに応じて進路選択が枠づけられる『トラッキング』のメカニズムだった。

B．本研究の背景＝1997年経年調査

79年調査以降、高校教育をめぐる大規模な変動が生じた。このことについて、高校改革を研究対象としたという意味でも、実証的な高校教育研究への道筋が検討されたという意味でも、そして本研究のメンバーの何人かが組織者や報告者として関わったという意味でも本研究の第２の出発点と言える教育社会学会大会課題研究「高校教育改革の課題と展望（1994年度）」「高校教育の社会学（1995年度）」でいくつかの変動が指摘されている。すなわち、個性化・多様化を中心とする教育理念の浸透、少子化による高等教育進学をめぐる状況や高卒労働市場の変貌、消費社会化の進行による高校生の生活や意識の変質などである。こうした変動の中で行われた97年経年調査は、まずは地方の２県で79年調査と同一対象校に対して同一方法で調査を実施して高校教育の変動をとらえた。97年経年調査の特徴は、１）時系列比較（定点観測）、２）仮説的キーワードとしてのトラッキングの弛緩、３）公立高校システムの研究という点にあった。

97年経年調査の知見は次の通りである。①わが国では、高校教育の進学準備教育への大規模なシフトが生起する中で高校の階層構造そのものは維持されていた。②高校の指導は、就職指導と校則指導からの撤退および学習指導と受験指導の強化という指導の特化が起きた。③学習指導と受験指導は、進学先や受験の方法（一般受験か学力推薦かスポーツ推薦か）の違いに応じて、高校ランクと対応して異なっていた。④生徒質問紙調査から生徒の意識と行動を見ると、生徒の学習時間は減少し、勉強からの疎外、現状維持志向、成績アイデンティティ（学業成績に基づいたアイデンティティの確立）の希薄化といった傾向も現れている。⑤以上①～④のことがらは、全体としての高校生活の比重の低下、社会階層の影響力の顕在化などの傾向をともなっていた。調査結果は、聖心女子大学論叢第92集・93集等に報告されている。

C．1999年調査のねらいと特徴

97年経年調査は、サンプリングに問題があった。79年調査からのおよそ２０年間で、高校の階層構造が我々の予測を越えて変動していたのである。97年経年調査は、時系列比較を重視し調査対象校を79年調査と同一対象校にしぼっていたため、結果として調査対象校が高校急増期以前から存在する学校階層上の地位の比較的高い高校に偏ってしまった。また、私立高校を除外していたため、学区内全体の高校階層構造をとらえきれなかった。さらに、この２０年間で様々なコースや学科が設置されたのに79年経年調査では、学校単位でしか分析しなかった。そこで我々はこれまでの調査対象県であるＡ・Ｂ両県のそれぞれ１地区に焦点を当て、地域の中心となる市内の全高校および市内の中学生が進学する高校全体に対象校を広げ、ほぼ

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

全ての高校階層を網羅するサンプリングを行った。また、データセットではランクや学校といった変数の他に入学時コース・学科といった変数が付け加えられた。このようにして、99年拡大調査では、時系列比較という利点をある程度断念する見返りに、1）全ての階層の高校を対象にしたトラッキング・メカニズムの探求ないしはトラッキングの弛緩の検討、2）募集単位にまで遡っての高校教育多様化の状況とその帰結、3）階層構造や多様化の進展の中での公立高校と私立高校の機能分担、などの検討が可能になった。

D．79年調査、97経年調査、99年拡大調査の概要

99年拡大調査＝「高校生文化と進路形成の変容－全高校階層への拡大調査－」調査では、97年経年調査実施対象校が立地する市内の他の高校および市内の中学卒業生が通っている市外の高校を新たに対象校に追加して、前回とほぼ同じ内容の聞き取り調査と生徒・教師対象質問紙調査をそれぞれ実施した。なお、97年経年調査を実施した高校は新たに調査を実施せず、97年経年調査のデータを分析に用いている。

1）99年拡大調査対象県および分析対象校

a）A県、東北地方、上位校2校、中位A校3校、中位B校3校、下位校4校。

b）B県、中部地方、上位校3校、中位A校3校、中位B校6校、下位校6校。

※79年調査、97経年調査は、B県では2地区を対象としていたが、今回は1地区のみを調査対象とした。

※4つの学校ランクは調査対象生徒の中学時成績の中央値をもとに作成した。なお、中位B校9校のうち4校、下位校10校のうち2校がそれぞれ県立専門高校であり、中位B校のうち1校が総合学科高校である。また、下位校のうち7校が私立高校である。

※今回の分析対象校の中に含まれる79年調査と97年経年調査の両調査を実施した高校はA県が6校、B県が4校である。

※調査対象校のプロフィールは当日報告する。

2）調査対象者および調査内容

a）学校調査（聞き取り調査）　79年11・12月、97年10・11月、99年11月に実施。

(1) 学校長、教頭に対する学校経営方針および学校全体の概況に関する聞き取り調査

(2) 教務主任、進路指導主任、生徒指導主任に対し、それぞれの校務分掌領域に於ける教育の実態および方針に関する聞き取り。

b）生徒対象質問紙調査：各校高校2年生4クラス以上に対する質問紙調査。79年11・12月、98年1・2月、2000年1・2月に実施。

c）教師対象質問紙調査：各校全教員に対する質問紙調査。79年11・12月、98年1・2月、2000年1・2月に実施。

d）生徒対象プレ・インタビュー調査：97年調査のみ実施。A県4校を抽出、各10名対象。

※なお、97年調査では近年の変化を念頭に置いて質問の追加・修正を行っている。

※分析対象者票数その他分析サンプルについては当日報告する。（樋田大二郎）

E．その他

1）詳細なデータ、参考・引用文献は、当日配布する。

2）本研究の教育社会学会での報告は、本報告と次の報告とに分けて行っている。大多和直樹・苅谷剛彦・岩木秀夫他「高校教育の構造変容（2）―生徒文化と教育改革」もあわせてご検討いただきたい。

3）本調査は、文部省科学研究費の助成を受けて実施した。＜平成11年度・12年度・13年度科学研究費基盤研究(B)(1)「高校生文化と進路形成の変容―大都市圏高校教育の変容を中心に―」（代表：樋田大二郎）＞

2．高校階層構造、選抜過程と生徒の属性

A．高校階層構造をめぐる課題

高校受験の輪切り選抜は今でも続いているのであろうか。高校を偏差値によって細かく序列化し、生徒の希望や興味・関心によらず、もっぱら成績によって“お釣りがこないように”受験先を決める選抜過程を輪切り選抜と呼んできた。輪切り選抜では、内申書、業者テストに基づいた綿密な指導は不合格者を出さないことに細心の配慮がなされた。その結果、中学時成績が最も優れた層の生徒が学区の最難関高校に進学し、次の成績層の生徒がセカンド・ベスト校に、さらにその次の生徒がサードベスト校に・・・と、生徒はあたかも成績でスライスされたかのように進学していった。しかし、一方で臨教審以降、個性化理念・多様化理念が浸透し、他方で1992年の埼玉県教委に発する業者テスト追放の広がりをうけて、中学では「行きたい学校」への進路指導が標榜されるようになった。また、同じく1992年の高校教育改革推進会議の第一次報告以降は高校教育の多様化が急速に進展した。もはやかつてのような輪切り選抜は存在しないのである。

本章の課題は、次の3点である。第1は、偏差値に基づいた序列的な高校の階層構造がどのように変化しているかの記述、第2は、階層構造の変化の中で輪切り選抜がどのように変化したかおよび学業成績は今日どのような役割を果たしているかの記述、第3に、輪切り選抜が弱まってたあとで、業績主義に代わるどのような選抜原理が働いているかの記述である。

B．学校ランク別に見た高校階層構造

これまでの2次にわたる調査では、学区内の教育関係者による位置づけや生徒の中学時成績の状況から高校をベスト校、セカンドベスト・サードベスト校、専門校の3ランクに分けて高校階層構造をとらえてき

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

た。しかし今回は、サンプル内に４番手校以下の高校も含まれており、これまでと同じランク分けは出来ない。そこで、まずは、生徒の中学卒業時の成績にもとづいて、対象校を上位校、中位Ａ校、中位Ｂ校、下位校の４ランクに分けて階層構造をとらえた。ただし、従来と比較して、私立高校も含めていること、学区内の全ての入学難易度の高校を対象にしていること、専門校を特別のカテゴリーに分けていないこと、などで異なったサンプリングとランク分けになっている。

それぞれのランクの高校に通っている生徒の中学時成績を見ると、ランクの高い高校ほど中学時の成績が高い生徒の割合が大きい。しかしその差違は小さい。各ランク毎の生徒の中学時成績は大きくオーバーラップしており、決して細かく輪切りにされてはいない。また、高校卒業後の進路希望を尋ねた結果では、４年制国立大学は上位校が最も多く87.1%、続いて中位Ａ校56.7%、そして中位Ｂ校19.8%となっている。明らかにランクごとに差がある。ただし、下位校は13.1%であり、中位Ｂ校と下位校との差は小さい。

Ｃ．学校別

２つの調査対象学区ごとに、中学時成績に基づく学校の階層構造を見たところ、ランクの高い高校ほど中学時成績が高い生徒の割合が大きい。しかし、ここでも異なるランクに属する学校間でのオーバーラップが大きい。また、輪切り選抜であるなら生じるはずの学力面での同質性の高さはみられず、むしろ、各高等学校は多様な中学時成績の生徒を抱えていることがわかった。本研究では、９階級に分けて中学時成績を尋ねているが、１割以上に達した階級すなわち在校生の中学時成績の割合が１割を越えた選択肢の散らばりを見ると、対象校３０校中わずか１校のみが２階級の分散にとどまり、３階級の散らばりにとどまる学校も８校にしかならない。それ以外の２１校では、校内に４ないしは５の範囲で大きく散らばった中学時成績の生徒を抱えている。こうした傾向は、とくに中位Ｂ校と下位校に強く、全ての学校が４ないし５の範囲にまたがっている。

かつての高校階層構造では、一般に公立普通科、公立専門科、普通科の順に序列づけられていたが、大都市圏から離れた２つの県で行った今回の調査では、おおむねそうした傾向が読みとれたが、例外が何校か見られた。また、卒業後の進路希望では、中学時成績による序列が高いほど４年制国立大学を希望する割合が高いが、ここでも例外があり、とくに専門学科の何校かでは高い割合で就職を希望している。

Ｄ．募集単位学科・コース別

本研究では、これまで学校を分析単位としてきたが、99年拡大調査では、募集単位（入試区分）を分析単位として追加して生徒の分析を行った。分析で明らかになった知見は、第１に、同一高校内の募集単位ごとに様々な差違が見られた。まず、専門高校では、同一高校内の各学科・コースごとに生徒の中学時成績、性別、家庭背景、志望動機、卒業後の希望進路などが大きく異なっている。また、普通科高校にも新タイプのコースが設置されており専門高校ほどでないがコース間に様々な差違がある。第２に、中学時成績の平均点をもとに募集単位ごとの順位表を作ると、順位表の上位は公立普通科高校の募集単位が独占しているが、それに次ぐ中位の集団には、公立専門高校の募集単位、私立高校の募集単位が混在する。なお、下位の集団には、公立専門高校と私立高校の募集単位が混ざっている。第３に、順位表の上位を占めている募集単位では、生徒の中学時成績の分散が小さく、中位以下の募集単位では分散が大きい。第４に、その結果、順位表の中位以下の募集単位では、生徒の中学時成績のオーバーラップが見られる。とくに中位集団の後ろ半分以下はほとんど重なった分布となっており、成績原理以外の高校選択メカニズムが働いていることを推測させる。

Ｅ．その他の分析

以上、いわゆる輪切り選抜が弛緩しつつあること、とくに成績中位層以下でこうした傾向が強く見られることを記述してきた。また、本章では、その他の様々な変数を用いて高校階層構造記述の試みをしている。さらに、今後、生徒の性別などの属性や家庭の経済＝社会的背景に焦点を当て、選抜過程の記述を行う予定である。データの紹介および検討結果の紹介は当日行う。（樋田大二郎）

３．カリキュラムの多様化と生徒の進路意識の変容

Ａ．問題設定

本節では、高校教育改革が進行する中で、高校のカリキュラムがどのように再編されているか、それが生徒の学習への構えや進路選択の動向にどのような影響をもたらしているか解明する。

1984～87年の臨時教育審議会以降本格化した高校の個性化・多様化政策は、現在もとどまることなく進行している。「特色ある学科・コース」の導入や総合学科の設置など、高校の教育内容を大幅に修正する改革が盛んに推進されている。これら多様化・個性化政策が推進された背景には、既存の高校教育に対する問題認識があった。これまで日本の高校は画一的なカリキュラムの下に序列構造を形成し、学力に応じて生徒を振り分ける選抜・配分装置となってきた。生徒は興味・関心や希望進路に関わらず、成績に応じて高校や高卒後の進路が規定される傾向があり、普通科非進学校における学習の無目的化や専門学科への不本意入学・不適応が問題とされてきた。高校の個性化・多様化政策は、１）興味・希望進路に応じた学習の機会を提供することで、生徒の学習へのインセンティブを高めると同時に、２）興味・関心を重視した進路選択へ転換を促すことで輪切り選抜の構造を是正することを目的としていたのである。

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

表Ⅰ－3－1 内容別 カリキュラム類型

	5教科型	一部専門導入型	専門教科型	多教科型
	5教科割合(総教科科目単位数に占める割合)が70%以上	5教科割合が70%以下 専門科目割合が30%以下	専門科目割合が30%以上	ひとつの領域の専門科目割合が30%以下、複数の専門教科の科目を履修
伝統的普通科型	【伝統進学型】 上位 4校 4コース 中位A 5校 5コース 中位B 2校 2コース 下位 3校 5コース 【伝統就職進学型】 中位B 1校 1コース 下位 2校 2コース			
伝統的普通科・特色ある学科コース併置型	【新旧進学型】 中位A 2校 2コース 【新旧混合型】 中位B 1校 1コース			
特色ある学科・コース一人文・理数系・語学	【新タイプ進学型】 上位 3校 3コース(小学科) 中位A 3校 3コース(小学科) 中位B 2校 2コース(小学科)			
特色ある学科・コース一情報	【新タイプ混合型】 下位 2校 2コース	【新タイプ(情)専門導入型】 下位 1校 1コース		
特色ある学科・コース一芸術・体育・語学(英語以外)・その他		【新タイプ(芸体他)専門導入型】 中位A 1校 1コース 中位B 2校 2コース 下位 1校 1コース	【新タイプ(芸体他)専門型】 中位 1校 4コース	【新タイプ多教科型】 中位B 1校 1コース 下位 1校 1コース
総合学科				中位B 1校 1学科
職業系専門学科			【専門伝統型】 中位A 2校 2コース(小学科) 中位B 5校 19コース(小学科) 下位 5校 10コース(小学科)	下位 3校 4コース(小学科)

※1 高校受験の段階から別枠になっている学科・コースについて、その性質を分類した。入学以降に、「普通コース」と「特色あるコース」に分化する場合には、混合型とした。例えば「新旧混合型」は入学後に「伝統的進学型」と「新タイプ専門導入型」に分化するものをいう。ランクについては、上表では、学校全体のランクをもとにプロットしたが、当日は学科・コースごとのランクでプロットした表も提示する。
※2 専門高校で設置された専門学科は、とりあえずすべて「職業系専門学科」のカテゴリーにカウントした。

しかし、改革が進行する中で、高校の教育内容がどのように再編されているか、それが生徒の学習への構えや進路形成にどのような影響をもたらしているかという点は十分に検証されてこなかった。そこで本報告部分では、1）まず、A県の高校12校、B県の高校18校を対象とした文献調査と、教員対象聞き取り調査（一部非実施）から、個性化・多様化政策がどの学校ランクでどのように推進されているか解明し、2）さらに生徒対象質問紙の結果から、異なるカリキュラムタイプで生徒の学習に対する意識、進路意識にどのような差異が生じてきているか考察することを試みる。

B. 新タイプのカリキュラムの内容と学校ランク

まず、「特色ある学科・コース（理数科や外国語科も含む）」や総合学科などの新しいタイプの学科・コースがどの学校ランクで導入されているか見たところ、上位校でも一定数導入されていることがわかった。しかし、各学校の「普通科の普通コース」「特色ある学科・コース」「専門学科」が、実際にどのような内容になっているか教科内容別に分類したところ（表Ⅰ—3—1）、上位校に設置された特色ある学科・コースはいわゆる5教科の割合を高めた「新タイプ進学型」の内容になっていることが判明した。これに対し、中位B校、下位校では情報系、芸術・体育系等の専門科目を導入した「新タイプ専門導入型」「新タイプ専門型」「新タイプ多教科型」を多く設置する傾向が見られた。このように、上位校は進学に特化したカリキュラムを組む傾向があるのに対し、中位B校、下位校は、非アカデミックで多様なカリキュラムを組む傾向が見られたのである。

C. 新タイプのカリキュラムの設置と生徒の進路動向

次に、こうした教育内容の差異が、生徒の学習への構えや進路選択の動向にどのような影響を及ぼしているか、生徒対象質問紙から見た。なお、表Ⅰ—3—1の類型ではカテゴリー数が多いので、「伝統進学型」「伝統就職進学型」「新旧進学」「新旧混合」「新タイプ進学型」を「進学普通型」に括った。また「新タイプ混合型」「新タイプ（情）専門導入型」「新タイプ（芸体他）専門導入型」「新タイプ（芸体他）専門型」「新タイプ多教科型」は「新タイプ型」に括った。こうして得られた「進学普通型」「新タイプ型」「専門学科」の3カテゴリーで分析を行った。その結果、同じ学校ランクでもカリキュラムタイプによって学習意識や進路意識が異なる見られたのである。

例えば同じ中位Bランクでも、「新タイプ型」の生徒は、「進学普通型」「専門学科」のカリキュラムを学ぶ生徒に比べ、高校が「Q100O生徒の興味・関心に応じた指導に力を入れている」「Q10P将来の生き方を考えさせる指導に力を入れている」と答える傾向が見られた（Q10Oに肯定的な答えを示した生徒の割合は「進学普通型」15.5%、「専門学科」24.3%、「新タイプ型」36.6%。Q10Pについては「進学普通型」26.1%、「専門学科」35.0%、「新タイプ型」42.9%）。また全体に、高校における学習に満足している傾向も見られた。また「新タイプ型」の生徒には「Q25 SQ14偏差値よりも学校の個性を見て選びたい」と答える割合も高く、興味・関心を重視した進路形成を志す傾向も見られたのである。その一方で、進路について見れば、同じランクでも「進学普通型」の生徒は大

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

学進学希望者の割合が高いのに対して、「新タイプ型」では、専門学校希望者の割合が高くなっていることもわかった。

D．考察

高校の個性化・多様化政策は、本来、興味・関心に基づく進路形成を促し、学校ランクと進路の対応関係に揺らぎをもたらそうとするものであった。しかし分析の結果、カリキュラムの多様化はもっぱら中下位、下位ランクの高校で進行しており、むしろ改革の中で上位校と中下位校・下位校が、アカデミックな科目に縛ってエリート教育を行うセクターと、楽しく学ばせるセクターへ分化する傾向が見られた。こうした教育内容の再編は、中下位校・下位校の生徒の学習に対する満足は高めるかも知れないが、結果としての進路格差は拡大させる可能性もあるのである。当日の発表では、より多くの変数を用いて、高校教育改革下で生じている新たなトラッキングのメカニズムについて考察していく予定である。（荒川葉）

4．教師の教育観の構造ー学校階層構造との関連を中心にー

A．問題の設定

授業や生徒指導の日常的場面で、教師の実践に影響を与えると思われる教師の教育観は、何によって規定されるのだろうか。第一に、教師個人の年齢・教職年数などの属性要因が考えられる。第二に、彼が属す高校の教育目標、生徒集団の状況、教育課程等の組織的特徴、地域性といった、その学校の置かれている独自の文脈が影響するはずである。第三にもう一つ重要な観点として、「個性重視」「支援」「新しい学力観」といった近年の政策的理念は、教師の教育観にどのように入り込み、指導に影響を与えているかというポイントがある。それらは、おそらく教育観にダイレクトに反映されるというよりは、学校の置かれている文脈や生徒集団の状況に応じて教師集団によって解釈され、指導場面に応じて変容しつつ、浸透していると考えられる。

本報告では、上の三つの観点を視野に入れ、現代の教師の教育観がどのように成り立っているのかを探り、その構造を描き出すことを目的とする。第一に、教師が授業や生徒指導の各場面でいかなる教育観を持っているのかを、学校ランクや属性別に明らかにする。ただし本要旨では、最も有意差が顕著だった学校ランク差（生徒質問紙調査で生徒が自己申告した中学卒業時の成績の学校別メディアンから析出した学校ランク）に焦点を絞って紹介する。第二に、教育政策の理念が、どのような高校の、いかなる指導場面で、教師の教育観に影響を与えているかを推測し、理念が教師の教育観に影響するプロセスについて考察する。

以下では、教師の日常的な指導の背後にある教育観をやや強引な手法によって浮かび上がらせようと試みた。教師対象質問紙調査の中で、二つの極端なことがらをA・Bペアにして、14項目設定し、授業や生徒指導の場面で「どちらかといえばAとBのどちらの考え方を重視しているか」を尋ね、４段階で答えてもらった。

B．優勢な教育観

表Ｉ－４－１を見ると、一方が７割以上という優勢な教育観が浮かび上がったのは、14項目のうち４項目であった。教育改革を主導する教育理念の一つは「個性重視」であるが、生活面では、約８割の教師が、「個性的な生徒を育てる」よりも「集団のなかでの協調性を養う」を重視し（Q10）、「若者の風俗や文化を尊重した指導」よりも「高校生にふさわしい服装や態度、行動をとらせる」を重視している（Q6）。このことから、規範的社会化は、ランクを問わず、学校の果たすべき社会的機能として認識されているといえる。

次に、授業面で優勢な教育観が見られた唯一の項目として、8割近い教師が「教科書の内容をとにかく最後まで扱う」よりも「一通り終わりまでやれなくても基本的な考え方を身につけさせる」を選んでいる（Q2）。これに対し、中学校や小学校で後者を選ぶ教師は、それぞれ57.1％と40.3％である（耳塚1998, 1999）。「新しい学力観」の理念が最も浸透していないはずの高校で、教科書を最後まで扱う意識が薄れる理由としては、特に下位校ほどこの傾向があることから、高校生が教科書についてこられない現状に教師が

表Ｉ-4-1 ランク別にみた教師の教育観（全14項目のうち抜粋）

相対立する教育観		上位校	中位A校	中位B校	下位校	合計
Q1 A全教科の学力をバランスよく身につけさせる v.s.B偏りがあっても、得意な教科の学力を伸ばす	Aを重視	52.9	41.3	38.9	36.5	41.3
	Bを重視	42.9	56.7	59.1	62.2	56.5
Q2 A教科書の内容を、とにかく最後まで扱うv.s.B一通り終わりまでやれなくても、基本的な考え方を身につけさせる	Aを重視	37.4	29.1	13.5	9.1	19.7
	Bを重視	60.1	69.2	84.7	89.4	78.5
Q6 A若者の風俗、流行や文化を尊重した指導をする v.s.B高校生にふさわしい服装や態度、行動をとらせる	Aを重視	14.7	13.8	15.5	16.1	15.2
	Bを重視	80.3	84.6	81.8	82.6	82.3
Q7 A授業を中心とした教科教育v.s.B基本的生活習慣や心の教育	Aを重視	56.3	51.0	38.9	33.4	42.8
	Bを重視	36.6	46.2	57.9	64.8	53.7
Q9 Aどの生徒にも、できるだけ学力をつけさせてやる v.s.B勉強が苦手な生徒には、別の能力を伸ばしてやる	Aを重視	70.6	66.8	53.2	51.6	58.6
	Bを重視	25.6	29.6	45.1	46.4	38.8
Q10 A集団のなかでの協調性を養うv.s.B集団から多少はみ出ても、個性的な生徒を育てる	Aを重視	74.8	76.9	80.5	80.8	78.9
	Bを重視	19.7	20.2	17.0	17.1	18.2
Q11 A学問的に重要なことがらよりも、生徒が楽しく学べる授業にするv.s.B授業の楽しさを多少犠牲にしても、学問的に重要なことがらを押さえる	Aを重視	37.8	47.8	59.6	64.5	54.7
	Bを重視	57.1	50.6	36.5	33.2	42.1
Q13 A子どもが持っている可能性が開花するのを、支援するv.s.B一人前の大人になるために必要なことを、教え、訓練する	Aを重視	64.7	55.9	54.7	52.6	56.1
	Bを重視	29.8	41.7	41.4	45.3	40.5

※数値は「Aを重視」「どちらかといえばAを重視」の合計%と「Bを重視」「どちらかといえばBを重視」の合計%

※サンプル数：上位校（238）中位A校(247)中位B校(404)下位校(386)

※無回答を含めて計算してある

※Q3,6,810,以外はすべて3%水準で有意

NII-Electronic Library Service

対応した結果と解釈できる。さらには、主に中B・下位ランクで起こっているカリキュラム選択の多様化や専門分化が、学習内容の基礎的共通性を保証するという意味での教科書の位置づけを、無効化していった側面も考えられる。

C．拮抗する教育観

A，Bのどちらを選ぶにしても4～6割くらいの拮抗している教育観は、14項目のうち7項目（うち授業面5項目）と多く、ほとんどの項目で高校ランク差が有意である。

授業面に関わるQ1，4，7，9，11をまとめると、上位校ほど「授業を中心とした教科教育」を重視し、「どの生徒にも」「全教科の学力をバランスよく」「学問的に重要なことがらを押さえ」ようとしている。一方、下位校になるほど、「生活習慣や心の教育」を重視し、授業面では「楽しく学べる授業」で「勉強が苦手な子には別の能力」「偏りがあっても得意な教科の学力」を伸ばそうとする。次に、Q13「子どもが持っている可能性が開花するのを支援する」と「一人前の大人になるために必要なことを教え訓練する」のどちらを重視するかを見ると、上位校で前者を選ぶ「支援型」が特徴的に多い。

D．教育のWHATとHOW－学校ランク間の差異－

以下では、上の拮抗する教育観のうち、いくつかのペアを選んでクロス分析を行い、何をどのように教育するのかに関する教育観の特徴を、学校ランク間の差異に注目して明らかにする。表Ⅱ－4－2は、Q13（支援か訓練か）とQ7（授業重視か生活習慣・心の教育重視か）、Q13とQ9（共通学力重視か多様な能力重視か）のクロス分析である。結果を要約すると、まず、上位校では授業重視支援型の教師が4割と顕著に多いのに対し、中位B校や下位校では、生活習慣・心の教育重視支援型と生活習慣・心の教育重視訓練型がそれぞれ約3割と高くなる。次に、教師が伸ばそうとしているのは、共通学力か多様な能力かに着目すると、上位校では共通学力支援型が5割と圧倒的なのに対し、中位A校では共通学力支援型が38%に減る一方で共通学力訓練型が32%と増える。さらに、中位B校および下位校では、共通学力支援型が約3割まで落ちると同時に、多様能力支援型が約25%、多様能力訓練型が約20%と多い。

表Ⅰ-4-2 教育観タイプの高校ランク別構成

Q13＊Q7	授業重視＊支援	授業重視＊訓練	生活習慣・心の教育重視＊支援	生活習慣・心の教育重視＊訓練
上位校	*40.5*	20.5	*27.0*	12.1
中位A校	*29.8*	23.0	*28.5*	18.7
中位B校	24.5	15.6	*32.8*	*27.1*
下位校	20.4	13.5	*33.2*	*32.9*
合計	*27.1*	17.3	*31.0*	24.6
Q13＊Q9	**共通学力＊支援**	**共通学力＊訓練**	**多様能力＊支援**	**多様能力＊訓練**
上位校	*50.5*	22.3	17.3	10.0
中位A校	*37.6*	*31.6*	19.7	11.1
中位B校	*30.7*	23.7	*26.5*	19.1
下位校	*28.2*	24.5	*25.5*	21.8
合計	*34.8*	*25.2*	23.2	16.7

※数値は全体の%。無回答を除いて計算してある。
※25%以上の数値はイタリック表示

E．近年の政策的理念と教師の教育観との関係

以上、教師の教育観における学校ランク差は、生活面では少ないが、授業面では全ての項目で有意であり、何をどう学ぶかという考え方自体に、上位校、中位A校、中位B校および下位校との間に大きな差異が生じている。それは、学力水準・学習態度・進路等の側面で残っている生徒集団の質の違いに応じた学習指導の現われと考えられる。ただし、30校中19校を占める中位B校と下位校の間では、このような指導戦略に重なりがある。

最後に、以上の学校ランク間の差異を踏まえた上で、近年の「個性重視」「支援」「新しい学力観」といった理念は、教師の教育観にどのような影響を与えたかについて考察する。第一に、こうした理念は、教師の教育観に入り込む時にランク間で異なった解釈が施されるが、場合によっては現状を正当化する方向で用いられる可能性がある。例えば、「個性重視」についてみれば、中位B校や下位校の教師の場合、眼前の生徒集団の特質・状況に対応するために余儀なくされてきた「枠付けの弱いソフトな授業」を、文脈フリーに正当化し、さらにこの傾向を強める働きを持っていた可能性がある。また、教師の意見を尋ねた別の設問で「新しい学力観は高校教育の現場にはなじまない」と答える教師は過半数を超えるが、そもそもアカデミックな伝統的授業が困難な下位ランクの高校になるほど、「そう思わない」教師が有意に多くなるのである。第二に、現場の実状には合わない理念が登場した時でも、何らかの解釈を施して理念を現場に反映させようとする動きが強い場合には、この行為自体が、教師の実践を変容させる場合がある。たとえば、上位校の教師は「支援」という方法にコミットしても、生徒集団の特質上、今まで通り「勉強が苦手な生徒にも学力をつけさせる」ことが可能と考えうるのに対し、中位B校や下位校の教師が「支援」という方法を導入しようとする場合、「楽しい授業」を通して「多様な能力を伸ばしてやる」という方向性でしか生徒の主体的な動機付けを確保できない可能性がある。したがって、中位B校や下位校において「支援」という理念が定着すれば、このような授業のやり方に一層傾斜していかざるを得ないと考えられる。（金子真理子）

NII-Electronic Library Service